



Title	WILLIAM FAULKNER AND THE AGRARIAN REVOLT : THE POPULIST LEGACY IN YOKNAPATAWPHA COUNTY
Author(s)	松原, 陽子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47163
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	まつばら 松原 陽子
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 21296 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	WILLIAM FAULKNER AND THE AGRARIAN REVOLT : THE POPULIST LEGACY IN YOKNAPATAWPHA COUNTY (ウィリアム・フォークナーと農民運動ーヨクナパトーフア郡におけるポピュリズムの遺産ー)
論文審査委員	(主査) 教授 仙葉 豊 (副査) 教授 ヨコタ・ジェリー 助教授 森 祐司

論文内容の要旨

小論は、20 世紀のアメリカ南部作家ウィリアム・フォークナーの作品を通して、19 世紀末にアメリカ南西部を中心に巻き起こった農民運動ポピュリズムが作家の想像力に与えた影響について考察する。

フォークナーがアメリカ文学史上において一地方作家からアメリカを代表する作家としての地位を確立して早半世紀以上が経つが、その地位は、1950 年代に学界を席卷した新批評主義によるいわゆる自国文学の「正典」形成と密接に関係していると言われている。そこには、当時の冷戦対立構造下において、フォークナーが反共のシンボルにふさわしい「個人主義」を体現する作家としてもはやされるようになったという経緯があり、この作家のイメージは 21 世紀の現在にまで残っているものと思われる。しかしながら、昨今では正典見直しの流れと共に、フォークナー作品の読み直しも活発に行われており、こうした中、近年のフォークナー批評は、かつて新批評主義によって作家と作品から切り離された文化的・社会的コンテクストを回復し、その中にフォークナーのテキストを位置づけながら読み直すという作業が中心となっている。これまでにも、作家および作品をめぐる広範囲に及ぶ様々な歴史的事象が取り上げられてきたが、興味深いことに、19 世紀末にアメリカ南西部を中心に巻き起こった農民運動ポピュリズムとの関連性から読み直す体系的な仕事はほぼ皆無に等しい。確かに、20 世紀前半に活躍したフォークナーと 19 世紀末に途絶えたこの運動との時間的隔たりは、両者を関連付ける上での大きな障壁になりうる。また、運動自体の消滅にもかかわらず、「ポピュリズム」という語はその後も一般的用語として生き残り、現在では政治や文化といった様々な領域において使われているという現状も、議論をより煩雑にしかねない。しかしながら、この農民運動の要求した政策の一部が、20 世紀初頭の革新主義や 1930 年代のニュー・ディール政策の中に引き継がれ実現したということからも、この農民運動が南部史のみならずアメリカ史全体においても重大な意味を持つものであったことは間違いなく、南部作家フォークナーの作品との関連性は考察に値するものであると思われる。

そこで、まず小論の第 1 章では、この 19 世紀末の農民運動が具体的にどのようなものであったかを理解するために、その歴史的概観を行っている。南北戦争が終結し、奴隷制度が廃止された新南部では、細かに分割した土地を自らの労働力以外に何も持たない農民らに貸し与える新たな小作制度が広まり、小作農人口が急増した。彼らは、雑貨店の商人に生活必需品などを供給してもらう代わりに、収穫前の作物にあらかじめ先取り権を設定される作物担保制

度により恒久的な負債と貧困にあえいでいた。こうした状況の中、テキサス州の小農家の一団が中心となり誕生したのが、後の人民党の前身団体農民同盟である。彼らは南部各地へ巡回講師を派遣し農民の啓蒙を目的とした教育プログラムを展開した。その結果、集団内での信頼関係が生み出され、土地所有者が中核の組織でありながら、同じ貧困状態に苦しむ非土地所有者と足並みをそろえる運動となった。こうした苦境を共有する環境の中で生まれた階級横断的な連帯こそが、奴隷制時代から南部に続く強固な階級社会にとって前例のない出来事であり、このポピュリズム運動の要でもあった。ただし、この運動は黒人と白人双方が参加したものだったにも関わらず、そこに生まれた連帯意識が黒人差別の克服には到底及ばなかったことも留意しておかねばならない。

以上の点を踏まえながら、残りの章ではいわゆるプア・ホワイト (poor whites 貧乏白人) を扱ったフォークナーの作品の中にこうしたポピュリズムの思想がどのように表れているのかを検証している。第2章では、フォークナーの出版された作品の中で初めて貧乏農夫の一家が主人公となった小説 *As I Lay Dying* (1930) を取り上げた。大恐慌のさきがけとなったウォール・ストリートでの株価暴落の翌日から執筆が始まったこの作品は、資本主義経済や革新主義と共に南部に遅れてやってきた近代化の波に対する作家の反応として読むことができ、それはかつてマルクスが近代ブルジョア社会を「堅固なもの全てが煙のように消える」と評した近代批判に通底している。経験の具体性を求めようとする生前の女主人公の姿や、死体が入った棺桶を何日もかけて運ぶ身勝手な男主人公に巻き込まれるようにして彼ら一家を助けることになる共同体の人々の様子には、資本主義的経験に回収されえない人間関係のあり方が示されており、そこに共有される経験を重視するポピュリズム的思想の系譜を見出すことができる。

第3章では、プア・ホワイトを扱った短編小説の中でも1930年代に出版された代表的な2作品、“Wash” (1934) と “Barn Burning” (1939) に注目した。いずれの作品のプロットも、主人公のプア・ホワイトが支配階級に属する者に対する怒りを実行に移すという点で共通しており、彼らの反逆行動が彼らの置かれている社会的・経済的弱者の立場に起因するものとして描かれている点に、プア・ホワイトの人々に対するフォークナーの共感的姿勢が示されている。しかし同時にそこには、こうした反抗的態度をあくまでも彼ら個人の勇敢な行為として描こうとする衝動も垣間見られ、これら両短編には、ポピュリズム的な経験の共有による人々の連帯に引かれつつも、個人主義的な価値観に拘ろうとする作家の集団的アイデンティティーに対するアンビバレントな立場が表れている。

こうした個人と集団との関係をめぐるフォークナーの相反する心情は、これらの短編が出版された時代背景と無縁ではない。第4章ではそれを裏付けるために、プア・ホワイトの一族を描いた *Snopes Trilogy* の第一作目 *The Hamlet* (1940) を、1930年代の大恐慌という時代背景の中で検討している。当時アメリカでは、ニュー・ディール政策の一環として、農村部の貧困状態を伝える数多くのドキュメンタリー写真が主要な大衆雑誌に掲載され、その中で南部の貧しい小作人たちは「アメリカ民衆」を表象する象徴的記号となり、未曾有の経済不況下のアメリカにおいて、「民衆」 (“the people”) の名の下に人々の団結を促そうとする政治言説が生み出された。また一方で、この時代は世界全体が長引く不況による社会不安を経験した結果、海の向こうでは全体主義の下での「大衆」の勃興が顕著となり始めた。その様子は、南部では下層階級の人々の経済的不満を結集することで跳梁したデマゴグたちを連想させ、「民衆」を独裁政治の温床と見なす否定的な見方も存在していた。フォークナーのこの作品にも、人々の集団化を個人の存在を脅かすものとしてとらえる視点が色濃く反映されているが、それと同時に、異なる階級間の人々をいわゆる「想像の共同体」で繋ぐ人間関係の可能性を模索しており、作家がポピュリズム的展望を放棄していないことを示唆している。

最終章では、この作家のポピュリズム的展望が、物語の構想から20年以上たった1950年代においても、決して途切れることがなかったことを3部作の残りの2作品 *The Town* (1957) と *The Mansion* (1959) を通じて考察している。この頃の南部は、1954年のブラウン判決による公立学校での人種分離廃止を受け、公民権運動が高まりを見せる時期でもある。そうした中、フォークナー自身は1950年のノーベル文学賞の受賞により、自国の人種問題に関して公の人物として意見を求められる立場となった。*The Town* における、町を代表しているはずの弁護士が実際には全くの無力である姿には、当時の作家自身の立場を自己風刺的に描いた跡がうかがえる。公には現実の人種問題に関して漸進主義を展開していたフォークナーだが、最終作の *The Mansion* では、立場は異なるものの共に弱者の境遇にある二人の人物の連携を認めるような関係を描き、そこに新たな人間関係の可能性を示唆している。両作品とも、30年代から続く「大衆」に対する作家の恐怖感が根強く表れていることに変わりはないが、黒人たちによる草の根の

大衆運動に示される新たな集団的アイデンティティーまで否定するものではないことが示されている。

以上のように見てくると、フォークナーの作品の中には、強い個人主義の傾向が表れながらも、個人同士が互いに共通の経験を共有することを通して、いかに関係を構築していくかということに対する作家の一貫した関心がうかがえる。もちろんこの経験の共有そのものが、極めて排他的な側面を有していることも忘れてはならない。しかしながら、異なる社会的地位の人々が結束するポピュリズム的人間関係のあり方は、社会的・経済的に分断された既存の社会構造の追認とつねに背中合わせではあるものの、人種と階級によって深く分断された当時の南部社会においては、新たな人間関係のビジョンを示す可能性の一つであったと考えられる。そしてその南部に生きたフォークナーは、こうしたポピュリズムの持つ保守性と急進性の両方を受け継いでいると言えるだろう。

論文審査の結果の要旨

この論文はアメリカ南部作家として著名な William Faulkner (ウィリアム・フォークナー) の作品をポピュリズム、近代化、集団運動と個人主義などの諸観点から論じたものである。1930年代の大恐慌時代に書かれ始めた南部のプア・ホワイトをテーマとして扱ったものが、第二次大戦をはさんでのそれ以後の作品と対比検討され、ポピュリズムというフォークナー研究には比較的珍しい論点が、独創的かつ緻密な分析を与えられている点が高く評価された。

ポピュリズムの意味を、通例の政治的な扇情的な運動という側面よりはむしろ、南部共同体における民衆的なビジョンと絆を作り出すという肯定的な側面が存在したことを、1890年代のアメリカ南部における農民団結運動であった Farmers' Alliance の活動を中心に分析し、この影響を後のフォークナーの作品群に読み込んでいるのが第1章である。

第2章は、大恐慌時代を背景に、ある貧しい白人の家族が亡くなった母親の死体を村から町まで運んでいく家族の物語である *As I lay dying* (『死の床に横たわりて』) を中心に、近代資本主義の南部への浸透とともに、近隣との関連を含めた家族と社会の共同体が崩壊していくさまを詳述しているが、道路網の整備がプア・ホワイトの階級にとっては諸刃の剣であったという部分は興味深い指摘である。

第4章では、いわゆる「スノーブス三部作」の第1作である *The Hamlet* 『村』(1940年) が取り扱われ、大恐慌時におけるニューディール政策のもつ集団主義的な傾向や、ナチの悪しき大衆扇動としてのポピュリズムにフォークナー自身が反対していたことはあるが、一方で、南部の民衆のもっていた共同体としてのビジョンとしてのポピュリズムをも指摘することが可能であると説いている。第5章では、*The Town* 『町』(1957年) と *The Mansion* 『館』(1959年) が取り扱われるが、ノーベル賞受賞後のフォークナーが、南部のプア・ホワイトの代弁をある意においてしなければならなくなった状況があったり、また黒人の市民権運動からの影響を受けながら、彼の民衆観が微妙に変化していくさまを分析している。

総じて、従来は個人主義的であり、あまり集団的な運動には否定的だったといわれるフォークナーのプア・ホワイトの作品群を、分厚いフォークナー学の先行研究をよく調べ上げながら、そのうえで果敢に新しい共同体と民衆への関心が一貫して存在したこと論証した点が評価された。ときおり議論にあいまいな点が窺えるものの、本論文の従来との議論とは違った、新しい意欲的な視点を損なうものではない。

以上のように、本論文は博士(言語文化学)の学位論文として十分価値があるものと認められる。